



TITLE:

学風を偲びて

AUTHOR(S):

向井, 喜典

---

CITATION:

向井, 喜典. 学風を偲びて. 経済論叢 1976, 117(5-6): 451-454

ISSUE DATE:

1976-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133647>

RIGHT:

# 經濟論叢

第117卷 第5・6号

---

## 哀 辞

故岸本英太郎教授遺影および原稿

社会・技術システム論の発展と

作業組織の再編成……………赤 岡 功 1

合衆国の大規模農場経営の位置と

その階級的性格(1)……………中 野 一 新 20

日本帝国主義下の中国北部占領地域開発の

「統合調整」と北支那開発株式会社……………鈴 木 茂 46

価値と分配について……………岡 本 義 行 72

「不変資本充用上の節約」の位置と構成……………吉 田 文 和 92

ホップズ社会哲学形成史における「歴史」の意味……………田 中 秀 夫 112

## 記 事

岸本教授逝く

追 憶 談 (渡部 徹・向井喜典・長谷川雅哉)

故岸本英太郎教授略歴・著作目録

---

昭和51年5・6月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 学風を偲びて

向井喜典

恩師岸本先生とのあまりにもあわただしいお別れをしなければならなくなりまして、演習卒業生代表としてあるいは僭越かと存じますけれども、追憶の言葉を述べさせていただきます次第でございます。

先生のゼミナールに参加させていただきましたのは昭和26年の春のことだったと記憶しております。あれからもう25年になります。この長い間、先生から直接、厳しいなかにも暖かい御指導をいただきながら、何ひとつ御礼申し上げる機会もないままに、先生は帰らぬ旅にたってしまわれました。御遺族様の御心痛は申すまでもなく、私達演習卒業生一同にとりまして、なんとしても諦めのつかないところでございます。

1昨年5月、先生の還暦をお祝いさせていただこうと、研究室関係者の方々、並びに演習卒業生一同が、先生のお住まいに程近い新緑の美しい宇治の地、山宜ゆかりの花屋敷に集まりまして、先生をお招きしましたあの日の先生のお顔が、臉にうかんで参ります。いましがた西村教授の弔辞にもございましたように、昨年2月、還暦記念論文集ができあがりまして、献呈会をもつことができましたことも、私どもにとりまして、つい先頃のこのように思いだされます。

昨年春から年末にかけて、先生の御健康は、私どもの目からお見受けしますと、近來にない程快方へ向われたと思ひ、御再起の日も程近いことと期待しておったわけでございます。ところが今、不幸にして悲しくもお別れの式に参列し、先生の御遺影の前に立ちましては胸もつまってくる思いでなりません。京都大学経済学会、『経済論叢』で予定されていた先生の御退官記念号のことを、心から楽しみにして下さいまして、岡山の地までわざわざ電話をいただいたのは、去年の11月はじめだったと記憶しております。ところが、これもいまとなっては悲しい思い出でしかありません。なぜ、こんなにも早く先生とお別れしなければならないことになったのか、嘆かれてならないのでございます。

私が先生のゼミナールに参加させていただきました昭和26年、1951年の頃は、先生が一方の旗頭であられた社会政策論の学界動向にとりまして、きわめて重要な時期でございました。従来、この分野において指導的な役割を果たしておられた東京大学の大河内一男先生の学説をめぐって、「社会政策本質論争」が展開されていた時期でございます。この論争は、第2次大戦の下でのわが国の社会政策論の成果が、戦後に残した学問遺産の意義について問うものであるとともに、戦後日本における新しい民主主義の建設へむけて深いかかわりをもつ論争でございました。昭和25年7月、先生が著わされた『社会政策論の根本問題』をはじめとする先生の一連の御労作は、この論争を大きく前進させました。そして、先生の学説は、学界の数多くの人達から「大河内先生の学説に代わる最も代表的な社会政策理論」という評価をさえ与えられたのであります。先生の御研究はこの時期、明治・大正期の社会主義思想、また労働運動史の領域にも拡げられ、それらの分野におきましても、学界に大きく貢献する幾多の労作をのこされたのでございます。

この時期、私はまだ大学院の学生であった時期でございますけれども、そうした昼夜を分たぬ御研究による緊張の連続のため、先生の御健康はすでに少なからず触れはじめておったように私も記憶致しております。私事で恐縮でございますが、大学院の学生としての私が最初に書いたものの報告を、当時先生が御入院になっておりました京都大学病院で、おききいただいたことをいまでもはっきりとおぼえております。学問の道には厳しく、社会生活においては比較的寛容であられたのが、私からみた先生でございました。ときとして、感情の起伏の激しい方であったようではありますけれど、それもまた、御自分の御病状のために、学界に対しては一定程度以上には貢献できず、また私達門下生に対しましても、十分な指導と援助をしてやることができないのと、客観的には異常なまでに御自分に厳しい先生御自身の苛立ちのためではなかったかと思われてなりません。

昭和30年代に入りまして、先生の御研究の主要な関心は、日本の労使関係、また賃金問題を中心とするより具体的な領域に進められました。学界全体といたしましても、戦後日本経済の新しい段階、いわゆる「高度経済成長」のもとでのいくつかの問題を反映しまして、「労働経済論」という新しい傾向が拡がりはじめた時期であります。そして、こうした学界動向に対応しながら、先生は労働経済論の体系化を大きく進められたのでございました。続きまして、昭和40年代の半ば頃から、先生の御関心は、現代の貧困化の問題、わけても公害問題、また老人問題の研究にむけられ、病状が極度に悪化しているなかであつたにもかかわらず、これらの領域においても幾つかの足跡をお残しになりました。さらに、学問を社会に還元すべく、労働調査や労働組合の企画など社会活動へ

の参加をかなり早い時期からなさっておられたことも忘れられてならないことであろうと思います。理論に対する厳しさと、現実に対する感覚の鋭さこそ、私達演習卒業生一同が先生から学ばせていただいた最大の教訓であったと思い、また私達一同、深く肝に銘じているところでございます。

先生の御研究のあしどりをこうしてたどってまいりますと、そこには明確なひとつの理論的基調というものが貫かれておったように、私には思われてなりません。機会あるごとに先生が仰言っておられたところでありますが、それは資本主義社会における貧困化、窮乏化という問題、その必然性の解明と、またその民主主義的な解決への方向であったと、こう申してよろしいかと考えます。昭和20年代の「社会政策本質論争」のなかで先生が確立されましたのは、この視点でした。そしてそれは、その後の御研究のなかにも貫かれておったところではなかったかと思われます。丁度、昨年6月下旬のことでございましたが、私は、先生から非常に細かい字でぎっしりとつめて書いてありますところの長い御手紙をいただいたことを思い出します。そこには、「健康に多少とも自信がついてきたので、定年退官の日までには是非とも、『現代資本主義と窮乏化法則』という書物をまとめておきたい」とお記しになっておられました。御病氣中にもかかわらず倦むことのない学究者としての先生の気魄に、深くうたれたものでございます。また、かねてから、御自分の研究生生活の足どりを思い出風に綴っておきたいと仰言っておられました御計画のこともあり、先生にとってさぞ心残りであったことと思われてなりません。

さらに、先生が文学や音楽の世界にも御造詣深いお方であられたこと、私達もこうした面でも少なからず啓発していただいたことなども、この機会に御紹介申し上げておく必要があらうかと考えます。

今日、社会政策・労働問題の研究の分野におきまして、戦後の研究史のあしどりをもう一遍検討しなおそうという試み、その研究方法についても新しい検討の気運が少なからず動いております。貧困化論の研究につきましても、地域における貧困化の問題をはじめとして、その視野が少なからず拡がってきております。これからの時期こそ、先生の学説の本来もっていたその意義がいよいよ鮮明になっていくはずであったのにとわかれてなりません。先生が御存命なら、そして御健康が許すようならば、学問の世界におきましても、再び昭和20年代にみられましたように一世を風靡する新風を、いま一度吹きこんでいただける好機であったのと思ひ、それだけに御逝去がなんとしても惜しまれてならないのでございます。

社会政策論の学界にとりまして、その研究史上たえず振返られる大いなる星の存在であられた先生は、私達演習卒業生、門下生一同にとりましては、学問を通して、ときに

は私生活にわたって、寛厳よろしきをえた眼差で見守ってくださる父親のような存在でございました。

今、お別れの時に臨みまして、先生への追慕の情があらためてこみあげて参ります。先生、どうかお静かにお眠り下さい。

これをもちまして、演習卒業生を代表いたしましての追憶の言葉にかえさせていただきます。